

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 2 月 21 日現在

機関番号：32665

研究種目：挑戦的研究(開拓)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H06195

研究課題名(和文)人工知能はどのように社会を変えるか ソーシャル・キャピタルと格差の視点からの検討

研究課題名(英文) Impact of AI on Our Society from the viewpoints of Social Capital and Inequality

研究代表者

稲葉 陽二 (Inaba, Yoji)

日本大学・法学部・教授

研究者番号：30366520

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 18,900,000円

研究成果の概要(和文)：AIは機械型とソフトウェア型がある。ソフトウェア型は、コピー(増産)の容易さから限界費用は機械型よりも格段に低いことが推定される。これは従来の労働経済学が主張するようにAIはロースキルでルーティンワークの職種から代替されるだけでなく、高スキル職種もAIに代替され、機械型AIと競合するロースキル職種でも人による労働が経済的合理性を持つ分野が残りうることを意味している。さらにソフトウェア型AIは限界費用がゼロに近づけば潜在的に公共財としての特質を保持する。本研究はこのプロセスをコスト構造とネット上のコモンズ(準公共財)創出の2つの観点から検討し、AIの社会受容性を向上させる施策を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

労働経済学の従来の知見と異なり、AIは、機械部分を持つ機械型と、それを必要としないソフトウェア型があり、AIを1単位増産することによって生じる限界費用が、ソフトウェア型AIは機械型よりも格段に低いことから、ノンルーティンワーク高スキル職種でもAIによって代替される可能性がある一方、ルーティンワーク低スキル職種でも雇用が維持される可能性を指摘した。また、ソフトウェア型は限界コストがコピーが機械型に比して容易であり、かつゼロに近づく可能性があり、ソフトウェア型AIは潜在的に公共財としての特質(非競争性と非排他性)を保持するため、その管理・運営については何らかの公的介入が必要であることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：We classified AI into two types; software type and types which require machine interface. Marginal cost of production could be lower in the latter type than that of the former type. According to traditional labor economics, low skill labor for routine tasks could be replaced by AI, while high skill workers is less affected by AI. However since MC of software type could be substantially lower than that of AI requiring machine interface, even high skill labor can be affected by the introduction of software type AI, while low skilled worker for routine tasks could be preserved as long as wage is kept lower than MC of the machine type AI. Moreover, as the MC of the software type AI approaches close to zero, the AI could hold basic characteristics of public goods. That means public intervention may be required to properly manage the software type AI.

研究分野：経済学、日本経済論、社会関係資本論

キーワード：AI 社会関係資本 ソーシャル・キャピタル ICT 格差

1. 研究開始当初の背景

AI の影響について特定目的のロボットなどの個別事例の研究は多数存在していたが、いずれも工学分野からの考察が中心であり、社会への影響の考察も職種単位での影響にとどまっていた。問題は部分的に「頭脳」を「機械」に置き換えるロボットだけでなく、包括的に「頭脳」を「機械」に置き換える汎用 AI の影響であるが、汎用 AI まで含めた社会への影響を具体的なデータの積み上げで提示した研究、特に、SC の論点から社会的弱者への影響を中心として、格差問題、健康(高齢化社会への対応)、教育の観点から整理し政策的含意を提示した文献は限られていた。

2. 研究の目的

本研究は、人工知能が人々の生活と社会にどのような影響を与えるのかを、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本、以下 SC と略)の観点から分析する。

3. 研究の方法

アンケート調査、経済実験、ロボット実装実験をつうじて得たデータから多変量解析を実施して、段階的接近法(逐次主要段階で見直しを入れる積み上げ方式)により、AI の普及に伴う影響について分析し、政策的含意を、経済格差、健康(高齢化社会への対応)、教育への対応の3つの視点で考察する。

4. 研究成果

(1) AI への認識とソーシャル・キャピタルの関係 稲葉陽二

2018年9月に実施した「AIの認識に関する調査」のデータ(N=5000)に基づき、ソーシャル・キャピタルがAIへの認識醸成に大きくかかわっていることを明らかにした。職場や団体参加を通じた社会関係資本はICTリテラシーの醸成をつうじて間接的にAIに対する肯定的な認識と関連しているし、認知的な社会関係資本も直接に肯定的なAIに対する肯定的な認識を形成するように思われる。一方、隣人や友人・知人との付き合いが厚いものはAIに対して否定的な認識を持つ。前者はAIを促進し、後者はAIについて注意を喚起するという意味で今後のAIの導入において車の両輪のように重要な役割を果たすのではないかと。今回のコロナ禍では、外出自粛によりもともとAIに否定的なチェック機能をもつ隣人や友人・知人との付き合いは減り、AIの否定的な認識が減る一方、職場の付き合いや団体活動のテレワーク化・WEB化が否応なしに促進され、国民全体のICTリテラシーが向上し、AIへの肯定的な認識が醸成される可能性が高い。構造的な社会関係資本は総じてAIの受容性を高める効果がある。一方、認知的な社会関係資本はもともと教育などから醸成され、コロナ禍の影響を受けるのではなく、コロナ対策の前提としての外生変数である可能性が高い。従って、コロナ禍によって全般にAIへの肯定的な認識が増すが、国家の個人への過度の関与など負の側面もより大きくなるので、認知的な社会関係資本を教育によって変えていくことが重要になる。

(2) AI はどのように社会を変えるのか 公共財としてのAI 稲葉陽二・立福家徳

Society 5.0 実現にむけて、AI による財・サービスの需給構造の理解が必須であるにも拘わらず、その点については言及されることが少ない点に着目し、Society 5.0 が想定する AI による財・サービスのコスト構造を簡易な静学的比較分析、つまり国民によりわかりやすい形を用いて

社会経済的に大きな影響を与える洞察を得ようと試みる。AIをソフトウェア型と機械型に分類し、両者の違いは「コピーの容易さ」であることから、AIのなかでもソフトウェア型AIが私的財から公共財へ変化する過程を分析のたたき台とするフレームワークを示した。さらにAIの影響について、社会関係資本の観点を含めて雇用と格差に焦点を当てて検討したのち、AIの供給面についてコモنزの概念を導入して、今後の政策含意を考察した。我々の分析によれば、AIにより賃金格差は縮小する可能性があるが、資産格差の拡大は不可避のように見える。労働市場における影響は低スキル対高スキルといった分類ではなく、高スキル職種も低スキル職種以上に影響を被る可能性がある。過度に悲観論に走る必要はないが、今後の変化の負の側面を軽減するためには、AIがもたらす成果の分配を考慮することが重要である。そのためには、AIの公共財としての側面を鑑みれば、すでにネット上に多数存在するAIの成果を共有する新たなコモنزを適切に維持管理するために社会関係資本を利用することも重要であろう。

(3) マッチングと社会関係 SNSのレコメンド機能からのインプリケーション 高木大資

従来、意見や態度は物理的に近い他者から影響受けると考えられてきたが、ICT/SNSで遠方の友人とつながることで、ローカルで「孤立可能」になった。SNSのレコメンド機能(AIによるマッチングサービス)が社会関係にどのような影響を及ぼすかを2018年9月に実施した「AIの認識に関する調査」のデータに基づき分析した。

(4) 人間と機械に対する信頼：信頼ゲームの実験結果から 八下田聖峰・奥山尚子・澤田康幸

信頼ゲームの経済実験(参加者249名)を行い、ゲームの相手が人間と機械である場合それぞれの信頼や信頼性について分析した。さらに、獲得金額を分け合うペアの認識に関する介入、つまりペアの顔が見えるかどうかという介入を行い、信頼や信頼性がどのような要素や介入と関係するのかについて検証した。実験の結果、主に三つの結果が得られた。第一に、信頼ゲームの相手が人間か機械かによって信頼や信頼性には差があり、相手が人間である場合のほうが機械である場合より信頼も信頼性も高かった。第二に、報酬を分け合うペアの認識に関する介入の元では、相手が人間か機械による信頼・信頼性の差が消滅した。第三に、ペアの認識に関する介入の効果はゲームの相手によって異なるが、相手が人間でも機械でも、介入によって信頼と信頼性が上昇した。機械に対する嗜好や価値判断や、金額を分け合うペアを知っている、あるいは知られているといった監視効果が信頼行動に影響を与える可能性が考えられる。

(5) 社会関係資本と時間調査からみたAIの影響 須田光郎

ソーシャル・キャピタルの計測に、時間(他者と交流する時間)を計測することについて独自の「生活時間調査」(N=524)をWEB調査にて実施した。時間は物理量であり、外界に実在し国際的に事物の計測の尺度として厳密に定義されており客観性に揺るぎがないことを示したのち、ネットワークの帯域幅、の概念を導入して、個人間のネットワーク強度の代理変数として、交流時間が適当であるとの仮説を示し、マクロレベルでも、ミクロレベルでも仮説が成立することを示した。

(6) AIへの親和性と格差～AI認識調査からの知見 小藪明生

先行研究ではインターネットや情報機器の利用には概ね年齢・所得・学歴といった基本的な社会

経済的属性に加えて、文化階層、社会関係の影響があることがわかる。本稿ではこれらを踏まえつつ、新たな時代において鍵となる AI に対する親和性について「AI の認識に関する調査」のデータ (N=5000) に基づき分析した。データ分析の結果を簡単にまとめると、まず一口に AI 技術といっても応用される領域によって、人々の反応は異なる。次に、家電的な情報機器の所有や業務上のパソコン関連のソフトの利用よりも、Web サービスなどの AI 技術の応用が進んだ情報機器・サービスの利用頻度や実際の AI 機器の利用経験が、AI 親和性と関連する。また、文化資本に関連する活動を行っていることや、頼りにできる人間関係をもつことで AI 親和性が高まる傾向もみられる。総合すると現段階では、AI に親和的であるかどうかは、より先端的な技術が使われている領域で応用的な技術に触れている、もしくはそのような領域の話題に積極的にコミットしていこうという知的好奇心や学習意欲との関連性があるのではないかと考えられる。「はじめに」で用いた調査結果に基づき、どのような要因が AI への親和性にかかわっているかを分析し、AI と格差の関連がこれまでのような物的資本を通じた再生産のプロセスよりも、教育や社会関係資本と関連する可能性があることを指摘した。具体的には、格差拡大の要因としての人的資本、その構成要素としてソーシャル・キャピタルの重要性であるとする考えを提示する。

(7) 家族としてのロボット 社会学からみた AI 佐藤嘉倫

AI を備えたロボットは家族の一員になれるのかというリサーチ・クエスチョンを立て、家族とは何か、家族の一員としてのペットなどの論点を踏まえながら、AI と人間の間のソーシャル・キャピタル形成の可能性について検討した。

(8) 教師支援用スマートロボットの教育効果：スマートロボットは生徒の認知的・非認知的能力の向上に貢献できるのか？ 露口健司

AI 搭載ヒト型ロボット (スマートロボット：Pepper) を 1 年間、授業において活用することで生じる生徒の変容について検討した。調査期間は 2018 年 4 月から 2019 年 3 月、調査対象は A 県 B 中学校、介入群 4 学級、非介入群 4 学級を設定した。授業では、モニター自動切り替えアプリ (教師の口頭指示でモニタースライドを切り替え)、小テスト自動化アプリ (配信・採点・集計・フィードバックのノンストップ化)、発言テキスト化アプリ (生徒の発言をモニターに 6 色に分けて文字化) の 3 つのアプリを開発・実装した。傾向スコアマッチング分析等の方法を用いて、学力・学習意欲の変容を確認した。分析の結果、学習意欲にのみ変化が認められた。学習意欲に関しては、pepper が教師の代替効果を果たす側面も認められた。社会科学学習意欲については、統計的有意差が認められ、中程度の効果量 (d) がみとめられた。Pepper 未配備学級では、教師との信頼関係が学習意欲に影響を及ぼしていた。一方、pepper 配備学級では、Pepper 配備によって、教師との信頼関係が欠如していても生徒の学習意欲が高まる可能性が確認された。スマートロボットが配備されていない学級では、教師との信頼関係が十分に醸成されないと学習意欲は高まらない。しかし、配備されている学級では、教師との信頼関係が低い場合でも学習意欲が高まっていた。スマートロボットが、教師と生徒の信頼関係がもつ機能を代替していると考えられる。つまり、授業力や生徒指導力が若干低い若年層教員等の学級では、スマートロボットを配備することで、学習意欲の維持向上が可能となるかもしれない。AI・ロボットは、ソーシャル・

キャピタルの機能を代替するかもしれないのである。さらに掘り下げた分析が必要ではあるが、生徒がスマートロボットとの間に愛着を形成し、それが本物の教師との信頼関係を代替している可能性がある。

(9) 医療現場における AI 藤原佳典

保健医療福祉分野における AI (機械学習) 導入の状況を概観し、がん診断と認知症対策における AI 活用の可能性を検討した。

(10) 自治体の AI 利用の可能性を探る 地域の結束型社会関係資本の維持に向けて
戸川和成

「AI の影響に関する意識調査」データ (group1~3、N=6000) のうち、辻中 (2006) 「自治会・町内会などの近隣住民組織に関する全国調査」のデータと接合可能な自治体 (N 20、行政区を除く) を対象に分析。地域社会において地縁的活動などの共助に動員するためのリソースが減少し、人による活動・取り組みには限界がある中で、単純集計分析では、地縁的活動に従事し、積極的に参加しているものであれば、どのような人でも AI を利活用した政策立案とコミュニティの見回りに賛成していることが明らかになった。さらに、多変量解析によれば、AI の利活用への意識は、加入世帯比率が平均より下回っている地域、財源が乏しい地域、生活の安全性に懸念が多い地域で地縁的活動に参加する住民ほど、肯定的となる傾向を示している。また、積極的に活動する住民は AI に効率性を期待している可能性があり、負担を軽減しうる手段と認識している。これらの知見は、担い手不足や財源不足という問題から、地縁的活動の労働の一部を人から AI に、代替しても良いことを示唆している。これは、地域社会運営に AI が地縁的活動参加者の労働コストを低減させる手段として有効であるならば、参加に伴う活動のコストが低減し、活動への参加が増えるという予測と共に、地域の結束型社会関係資本の維持への波及を予想できる。

(11) 労働は人工知能によって代替可能か 業務に注目した賃金関数からのアプローチ
立福家徳

「事務職会社員のタスクと賃金に関する調査」を実施。この調査は、2019年2月22日~2月27日の期間内に、東京、埼玉、神奈川、千葉の20歳~59歳の男女事務職員を対象とし、インターネットモニター調査を行い8952人から有効回答を得た。個票データから事務職員の業務(15タスク)を説明変数とする賃金関数を推計。それにもとづき業務タスクごとの賃金にかんする限界効果を推計し、タスクごとに人工知能との代替の可能性を検討した。さらに、業務とソーシャル・キャピタルの関係については、業務間の連携に注目し、0-ring 生産関数 (Kremer (1993)) を敷衍し、日本型のそれぞれの職業において、AI によって業務を切り分けることが可能であっても、その業務をつなげる点について企業内のソーシャル・キャピタルがなければむしろ生産性は低下する可能性を指摘した。また、正社員の多くが新卒時に一括採用され、労働者が OJT を通じて、総合職として育成される日本型雇用慣行の下では、業務と正規雇用者との紐づけがあいまいである欠点 (山本 2019) を、企業内ソーシャル・キャピタルが構築されて対応しているが、人工知能を組み込むことは、比較的業務と正規雇用者との関係が明確で、労働者の流動性が高く、企業内ソーシャル・キャピタルが日本と比べて低いであろう欧米諸国より多くの困難を伴う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 Inaba, Yoji and Togawa Kazunari	4. 巻 -
2. 論文標題 Social Capital in the Creation of AI Perception	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Behaviormetrika	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1007/s41237-020-00107-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 稲葉 陽二	4. 巻 56 (4)
2. 論文標題 AIはどのように社会をかえるかー公共財としてのAIー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 1 - 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 立福 家徳	4. 巻 56(4)
2. 論文標題 労働は人工知能によって代替可能か	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 23-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 戸川和成・稲葉陽二	4. 巻 56(4)
2. 論文標題 自治体のAI利用の可能性を探るー地域の結束型社会関係資本の維持に向けて社会実装は可能かー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 61-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 須田 光郎	4. 巻 56(4)
2. 論文標題 ソーシャルキャピタルの客観的計測－時間を用いた計測方法の検討－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 89-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 朴 玲怜	4. 巻 56(4)
2. 論文標題 第4次産業革命時代におけるソーシャル・キャピタルの意義－機械への信頼の醸成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 121-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲葉 陽二	4. 巻 56(3)
2. 論文標題 「AIの影響に関する意識調査」の概要と予備的分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 251-285
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Inaba, Yoji	4. 巻 56(3)
2. 論文標題 Reflections on the value of social capital	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲葉 陽二	4. 巻 48
2. 論文標題 社会関係研究の新しいフロンティア	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会学年報	6. 最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi/10.11271/tss48.77	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉 陽二	4. 巻 61
2. 論文標題 社会関係資本、経済格差、投票率との関係ー都道府県データによる考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法学紀要	6. 最初と最後の頁 267-285
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲葉陽二	4. 巻 55
2. 論文標題 AIはどのように職を奪うか 経済学の視点からの一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 102-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tsuyuguchi, K., and Kuramoto	4. 巻 1
2. 論文標題 Tsuyuguchi, K., and Kuramoto, T., The effect of key competency of social capital	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of School Improvement and Leadership	6. 最初と最後の頁 85-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 露口健司	4. 巻 64
2. 論文標題 学校におけるソーシャル・キャピタルと主観的幸福感：「つながり」は子どもと保護者を幸せにできるのか？	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 171-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 立福家徳・稲葉陽二・石田祐
2. 発表標題 ソーシャル・キャピタルと人工知能
3. 学会等名 日本NPO学会第21回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Inaba, Yoji
2. 発表標題 How is social capital associated with AI? An observation from a survey of residents in metropolitan Tokyo
3. 学会等名 人工知能学会第33回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉陽二・露口健司・立福家徳
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるかー経済学・教育学・社会関係資本論の視点からの検討
3. 学会等名 日本行動計量学会第47回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉 陽二
2. 発表標題 社会関係資本はAIに関する認識とどう結びついているのか
3. 学会等名 日本行動計量学会第47回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉 陽二
2. 発表標題 AIはどのように社会を変えるのかー社会関係資本の視点からの検討
3. 学会等名 日本計画行政学会第42回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Inaba, Yoji
2. 発表標題 New frontiers of Social Capital Study
3. 学会等名 日本経済政策学会第18回国際大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉陽二
2. 発表標題 ソーシャル・キャピタルと健康，幸福感に関する研究の新展開2：心理学，社会疫学，政治学の協働可能性を探る（シンポジウム）
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲葉陽二・石田祐・露口健司・立福家徳
2. 発表標題 人工知能とソーシャル・キャピタル(ワークショップ)
3. 学会等名 日本計画行政学会第41回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲葉陽二
2. 発表標題 AIはどのように職を奪うか 経済学の視点からの一考察
3. 学会等名 日本計画行政学会第41回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲葉陽二
2. 発表標題 AIはどのように社会をかえるのか 社会関係資本と格差の視点からの検討
3. 学会等名 日本行動計量学会第46回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲葉陽二
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか 社会関係資本の視点からの検討(ワークショップ)
3. 学会等名 日本行動計量学会第46回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤嘉倫
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか 社会学の視点からの検討(ワークショップ)
3. 学会等名 日本行動計量学会第46回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 露口健司
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか 教育の視点からの検討(ワークショップ)
3. 学会等名 日本行動計量学会第46回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原佳典
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか 公衆衛生学の視点からの検討(ワークショップ)
3. 学会等名 日本行動計量学会第46回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 立福家徳
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか 経済学の視点からの検討(ワークショップ)
3. 学会等名 日本行動計量学会第46回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲葉陽二
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか 社会関係資本の視点からの検討（公募パネル）
3. 学会等名 日本NPO学会第20回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤嘉倫
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか 人工知能を備えたロボットは家族の一員になれるか？（公募パネル）
3. 学会等名 日本NPO学会第20回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原佳典
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか 医療公衆衛生からのアプローチ（公募パネル）
3. 学会等名 日本NPO学会第20回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田祐
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか AIの活用と社会生活（公募パネル）
3. 学会等名 日本NPO学会第20回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 立福家徳
2. 発表標題 人工知能はどのように社会を変えるか 経済学からのアプローチ（公募パネル）
3. 学会等名 日本NPO学会第20回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲葉陽二
2. 発表標題 人工知能とソーシャル・キャピタル AI開発のビジョンを踏まえた教育・社会学・公衆衛生の観点から（ワークショップ）
3. 学会等名 日本計画行政学会第40回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 稲葉陽二
2. 発表標題 社会関係資本研究の現状と課題（ワークショップ）
3. 学会等名 日本計画行政学会第40回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 露口健司
2. 発表標題 人工知能とソーシャル・キャピタル 人工知能と教育（ワークショップ）
3. 学会等名 日本計画行政学会第40回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 露口健司
2. 発表標題 教育分野における社会関係資本研究の動向（ワークショップ）
3. 学会等名 日本計画行政学会第40回全国大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 佐藤嘉倫・稲葉陽二・藤原佳典（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 約200頁
3. 書名 ソーシャル・キャピタルとAI	

1. 著者名 佐藤 嘉倫	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 268
3. 書名 ソーシャル・キャピタルと社会	

1. 著者名 露口 健司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ジダイ社	5. 総ページ数 252
3. 書名 ソーシャル・キャピタルで解く教育問題	

〔産業財産権〕

〔その他〕

稲葉陽二研究室 WEB調査「AIの意識に関する調査」集計結果
<https://sites.google.com/site/inabayojilabo/>
 稲葉陽二研究室 研究計画
<https://sites.google.com/site/inabayojilabo/project>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	立福 家徳 (Tatefuku Ienori) (10723083)	日本大学・法学部・助教 (32665)	
研究分担者	高木 大資 (Takagi Daisuke) (10724726)	東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・講師 (12601)	
研究分担者	石田 祐 (Ishida Yu) (20455554)	宮城大学・事業構想学群(部)・准教授 (21301)	
研究分担者	藤原 佳典 (Fujiwara Yosinori) (50332367)	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長 (82674)	
研究分担者	石田 光規 (Ishida Mitsuki) (60453495)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	露口 健司 (Tsuyuguchi Kennji) (70312139)	愛媛大学・教育学研究科・教授 (16301)	
研究分担者	奥山 尚子 (Okuyama Naoko) (80617556)	大阪学院大学・経済学部・准教授 (34403)	
研究分担者	佐藤 嘉倫 (Sato Yoshimichi) (90196288)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	西川 雅史 (Nisikawa Masafumi) (90334143)	青山学院大学・経済学部・教授 (32601)	
研究分担者	澤田 康幸 (Sawada Yasuyuki) (40322078)	東京大学・大学院経済学研究科（経済学部）・教授 (12601)	
研究分担者	金光 淳 (Kanemitsu Jun) (60414075)	京都産業大学・現代社会学部・教授 (34304)	